

保育者養成校における教授法について

——言語活動を通じて——

A Study on Teaching Methods at Training Schools for Nursery-School Teachers: Through Language Activities

西村 豊 原田 敬文

Yutaka Nishimura, Takafumi Harada

はじめに

2017年に告示された幼稚園教育要領、保育所保育指針および幼保連携型認定こども園教育・保育要領では、満3歳以上の幼児教育の共通化が示された。「言葉」の領域では、「経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う」^{1)~3)}という大目標は変更がなかったが、「1ねらい」では「(3)日常生活に必要な言葉が分かるようになる」とともに、絵本や物語などに親(3)日常生活に必要な言葉が分かるようになる」とともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、先生や友達と心を通わせる」^{1)~3)}と「言葉に対する感覚を豊かにし」という記述が加えられた。また、「内容の取扱い」については「(4) 幼児が生活の中で、言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現などに触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにすること。その際、絵本や物語に親しんだり、言葉遊びなどをしたりすることを通して、言葉が豊かになるようにすること」^{1)~3)}の項目が新たに加えられた。

今回の改定で新しく追加された「言葉に対する感覚を豊かに」するために、「言葉の響きやリズム」「新しい言葉や表現」「言葉遊び」などの具体的な内容が明示されたと考えることができる。

このように5領域の中で中核ともいえる「言葉」の指導について改訂された意図をくみ取り、保育の中でこれらの内容を保障していくために、養成校における授業のあり方も、より実践的な内容を含む活動を取り入れていくことが求められていると言える。本研究では各養成校での特色ある授業実践の先行事例をいくつか紹介し、今後の養成校での教授法のあり方について考察する。

研究

2020年9月に国立情報学研究所の文献情報・学術情報検索サービス (CiNii Articles) による論文検索とインターネットや文献で公開されている保育者養成校の「言葉」に関するシラバスを調べ、内容を確認した上で、最終的に合計で25本の論文やシラバスを検討した。

結果

先行研究、インターネット、文献で公開されているシラバスを25本に絞り、検討した結果、「絵本の読み聞かせ」、「絵本作成とその読み聞かせ」、「紙芝居作成とその読み聞かせ」、「言葉遊び」、「素話・ストーリーテリング」、「イメージと言葉」、「わらべ歌・手遊び」、「パネルシアター」、「お話作り」、「劇づくり・劇遊び」等のキーワードが多数抽出され、様々な指導がなされていることが明らかになった。その中で、特色があり、今後、授業を行っていく上で大いに参考になると思われる5つの授業実践例について、授業実践者の意図、授業実践の内容・特色、その実践から得られた結果と考察という項目から以下より示す。

保育者養成校における授業実践例

絵本ノートの作成

1. 授業実践者の意図

加藤(2015)は、学生に対して幅広いジャンルの絵本に触れさせ、絵本への興味や知識を広げることが意図して、「絵本ノート」の作成を試みている。加藤によれば、学生であるこの時期はとても貴重であり、保育の現場に出てからでは、なかなかまとまった時間が取れないので、在学中になるべく多くの本に触れることの大切さを伝え、これが現場に出たときの実践力になると強調して、絵本ノート作成のやり方とその利点を説明している。また、このことが、学生のモチベーションを上げることに繋がり、作成途中の困難さを乗り越える力になると考え、授業実践を行っている。

2. 授業実践の内容・特色

絵本ノートの形式は、①絵本のタイトル、②絵本ノートの枚数の連番を記入、③選んだ本の情報として、作者、出版社、出版年、対象年齢、④あらすじ(この本を読んだことのない人を想定しながら分かりやすく書く)、⑤印象に残ったシーン、⑥この本からのメッセージ(イラストや折り紙などいろいろな画材で表現する)の6つの項目としている。

絵本ノートを作成する利点として次の8つの点を挙げている。

- 1) 絵本を読んで、内容を理解した上で、文章をまとめるので、要約力がつく。
- 2) 絵を描くことによりイメージが豊になり、表現力が向上する。

- 3) 「年齢・季節・活動」を考慮した上で、絵本を選定する判断力が養われる。
- 4) 絵本を読みながら「子どもに伝えたいこと」を考え、子どものイメージを膨らませることができる。
- 5) 絵本をたくさん読むことで、絵本の世界に慣れ親しむことができ、知識や理解力が身に付き、感性が磨かれていく。
- 6) 絵本を見ただけで、どんな絵本か思い出せる。
- 7) 絵を見ただけで、同じ作者が分かる。
- 8) 絵本ノートを作成してきた持続力、達成感が自信となり、仕事への意欲に繋がる効果がある。⁴⁾

加藤は、絵本ノート作成のルールとして、絵本ノート提出枚数は添削して返却する期間も含めるので、15コマの授業期間中、14コマの授業期間の範囲で行い、最低でも15枚以上を仕上げることで、出来上がったら随時提出し、確認してもらうこと。提出期限を厳守することとしている。内容が良く、芸術的にも高い作品は、皆の前で褒め、意識を高めるとともに、他の学生に参考になるよう授業中に展示を行っている。また、完成し提出された絵本ノートは評価にも大きく影響することを伝え、モチベーションを上げるようにしている。

3. その実践から得られた結果と考察

絵本ノートの作成は元来学生にとって負担のかかる課題である。しかし、この授業では、絵本ノートを作成する上での様々な条件・作成ルールを設けて、通り一遍の絵本ノート作成にならないようにさらなる工夫・配慮がなされており、学生たちは、この活動をやることによって、絵本への興味を持ち、知識を広げるだけでなく、利点としてあげられている「言葉」の力がつき、「絵本ノートを作成してきた持続力、達成感が自信となる」と言える。

絵本ビブリオバトル

1. 授業実践者の意図

鈴木(2016)は、保育者を目指す学生たちがこれまで身に付けてきた絵本を選択する技術を披露するための機会として絵本ビブリオバトルを企画し、授業実践している。

2. 授業実践の内容・特色

1) ビブリオバトルとは

ビブリオバトルとは、自分の選んだ本を持参し、その本の魅力について他者に説明するという書評ゲームである。しかし、本実践においては、本来のビブリオバトルを変則的に運用し、クラスを9つに分けた各グループで、それぞれのメンバーが持ち寄った絵本を紹介するだけでなく、その絵本の読み聞かせも行った後、最も子どもたちに読ませたい本を選択し、各グループの代表絵本とするルールで実施している。

2) テーマ：「いのち」または「どうぶつ」に関わる絵本

本学では、「いのちをまなぶキャンパス」を掲げており、絵本選択のテーマとして、「いのち」または「どうぶつ」に関連する絵本としている。

3) ルール

本実践を行う事前準備の課題として、最低限5冊の絵本に目を通し、それぞれの絵本の分析をまとめて提出する作業を課した上で、学生に下記のルールを示している。

- (a) 一人一人が絵本を一冊持参する。
- (b) まず予選として、一人ずつその絵本の魅力を紹介する。紹介を終えた後に、絵本を一人ずつ読む。
- (c) 予選においては、「どの絵本を最も紹介したいか」、「どの絵本を最も子どもたちに読ませたいか」をグループ内の投票で決める。
- (d) 決勝として、各グループの代表が全体の前で絵本の魅力を紹介し、読み聞かせを行う。「どの絵本を最も紹介したいか」、「どの絵本を最も子どもたちに読ませたいか」について全員を投票を行い、優勝チーム（チャンプ本）を決定する。

※対象は幼稚園の年中および年長児にあたる4, 5歳を想定し、これまで授業内で取り扱った絵本は除外することをルールとして付け加えている。⁵⁾

3. その実践から得られた結果と考察

鈴木は実践後の学生の感想として、「自分だったら手に取らない絵本に意外な魅力があることが分かってよかった」、「知っている絵本でも他の人に読んでもらうと印象が違うことがよく分かった」、「今回、新しく知ることができた絵本をぜひ、実習で生かしたい」⁵⁾などを挙げている。

しかし、鈴木は、上記の感想も含めて学生の絵本の選択について興味深いことを指摘している。

グループ代表が絵本の紹介後、対象学生にとっては「どうぶつ」を題材とした楽しい絵本よりも、「いのち」から連想される「死」にまつわる感動的な物語に惹かれていく傾向が見られる。さらに、既に紹介したように実践後の感想にしても、こうした絵本を保育の場で読んでみたいと思う学生が数多く存在している。

しかし、ここで見落とされがちな視点は、成人から評価の高い絵本が必ずしも幼児からの心を捉えることができるわけではないということである。たとえば松居(1973)は絵本選択の視点として、「子どもの側から発想されている絵本」と「おとなの側から発想されている絵本」という視点の分類を提示している。松居によれば、この分類は絵本の優劣の問題ではないものの、後者については、「子どもはかくあるべし、人間はかくあらねばならぬといった、やや押し付け気味の観念的な絵本が多い」と指摘している。

本実践における学生の絵本選択も、松居の指摘する後者の視点に立った絵本選択の傾向を示しているといえる。⁵⁾

このビブリオバトルの取り組みは、学生にとって楽しく、やりがいのあるものであり、絵本紹介やその絵本の読み聞かせを聴くことで学生の絵本に対する視点が、広がったと考えられる。と同時に、松居の絵本選択の視点を学生に認識させることは、学生が保育者になったときに、時には子ども本位に、そして、時には大人の視点でと両面から絵本を活用する力が身に付くと推測される。

絵本の読み聞かせの技術習得

1. 授業実践者の意図

岩谷・上月（2019）は、学生の絵本の読み聞かせの知識・技能の認識の甘さを実感し、学生が初めての実習に臨むにあたって、保育技術としての必要性がある絵本の読み聞かせについての指導の在り方について授業実践している。

2. 授業実践の内容・特色

- 1) 実習予定の配属学級の年齢を対象とした絵本を各自が選び、指導計画を基に一人10分の読み聞かせの模擬保育を行った。
- 2) 保育を実施するにあたり絵本の読み聞かせの指導計画の展開（ねらい・内容・時間・環境構成・予想される幼児の活動・教師の援助）を記述し、模擬保育を行った。
- 3) 読み聞かせの環境は室内前方に保育役が位置し、幼児椅子に座って読む。幼児役の学生は床に座って聞くようにする。同時に、幼児視線の高さに固定したビデオカメラで撮影した。
- 4) 模擬保育を行った翌週の授業において反省会を行った。保育者役の学生が反省をした後に、幼児役の学生が気付いた点を発言し、まとめとして指導教員が助言を行った。その際、ビデオ映像を視聴し、改善すべき点を取り上げ、それらを次のように分類・整理し、模擬保育を行った全ての学生の「気になる点と思われる内容」を一覧表にすることにより読み聞かせの技術の課題を探り、考察した。

導 入：時間・間の取り方、保育者の言葉づかい、話し方の表情、次の活動とのつながり、
室内環境、活動の説明

読み聞かせ：読み方、保育者の視線、座り方、絵本の扱い・持ち方・位置、言葉・内容の理解
読み聞かせ後の振り返り：話す速度・間・時間の取り方、話す内容・姿勢、次の活動への導き

- 5) 反省会を終えた学生が、自分の保育について再度振り返り、反省及び課題を振り返りレポートにまとめる。それらの内容を分類・整理し、学生の読み聞かせの捉え方や課題を探り、考察する。実践の振り返りレポートのまとめは次の項目についての「反省及び課題」をまとめている。

事 前：絵本選び、読む練習

保 育：導入、読み聞かせ、読み聞かせ後の振り返り

- 6) 4)の「絵本の読み聞かせの気になる点」と5)の「振り返りレポートのまとめ」の結果、次の3点が課題として挙げたとしている。

- (a) 導入が、読み聞かせの内容と連動していない。
- (b) 読み聞かせの間、子どもの視線が合わない。
- (c) 読み聞かせ後、振り返りの時間が長く、内容が曖昧である。⁶⁾

3. その実践から得られた結果と考察

岩谷・上月 (2019) は、「読み聞かせの技術は、経験によって向上するものであるとともに、比較的短い期間に、ある程度まで上達可能な技術である」という考えを紹介しながらも、ほとんどの保育園や幼稚園で取り入れられている活動であり、現場に入った時に困らないよう、大学入学後の比較的早い時期から学ぶ必要性を強く感じており、そのための、より効果的で実践的な指導法を検証したのである。

一般的に反省会においては、主観的な反省や振り返りの面が強く出てしまうこともあるが、ここではビデオを使用しており、客観的で徹底的な検証がなされていると思われる。ビデオを使用することは特別のことではないと思われるかも知れないが、ビデオにとどまらず、保育者を目指す学生にとって、あらゆる場面で自分自身の保育行為をより客観的に振り返り、改善していくという姿勢・視点をスキルとして身に付けること繋がっていくならば、この授業の意義は大変大きいと考えられる。

紙芝居作成とその活用

1. 授業実践者の意図

西尾 (2017) は、「言葉」指導で大切なことは、「その本質について理解すること」である。そして、その本質を理解するには、「幼児教育で用いる実際の教材の作成やそれを使用しながら学ぶことも大切である」としている。そして、幼児教育では絵本などの画像と言語表現が一体となった教材が多く、この視点から、紙芝居作成は、画像との関係性を理解しながら「言葉」指導や教育の方法、特質等を理解するために有効であると考え、宮沢賢治の「注文の多い料理店」を題材として授業実践を行っている。

2. 授業実践の内容・特色

- 1) 「注文の多い料理店」を言語文化的視点から読解し、作品内容と構造を理解する。
- 2) 「注文の多い料理店」の紙芝居作品 (DVD 化されたもの)、2種類の絵本、つまり画像の異なる3作品の教材を学習し、言語表現と画像の関係性を理解する。
※いずれも、言語表現については宮沢の原作のままでまったく同じである。それぞれの作品のイメージがどのように変化するのかを学ぶのである。
- 3) こうした画像と言葉との関連性を理解したうえで、グループに分かれ紙芝居を作成する。
- 4) 紙芝居作成にあたって、まずグループで全体の方向性 (方針) を決定し、A3用紙を8つ折りにし、コンテとストーリーを描いていく。方向性 (方針) については、物語性が強いストーリー展開を中心にするものか、あるいは、物事の認識や名称の理解を目的とするものか、幼児を対象とする紙芝居や絵本は2種類に大別されることを担当教員 (西尾) が学生に最初に説明する。そして、学生達は、グループでいずれの内容のものを作成するかを話し合うことになる。
- 5) グループで紙芝居を完成させる。なお、画像の色づけに使用する用具も、色鉛筆、絵の具、マジックなどそれぞれのグループがその内容にあわせて自由に選ぶ。
- 6) 紙芝居の読み聞かせを実施し、学生はすべての作品に触れ、それを踏まえて振り返りを行う。⁷⁾

3. その実践から得られた結果と考察

西尾は「注文の多い料理店」の画像の異なる3作品の比較を通して、画像などの視覚的イメージが加わることで、読解の視座が固定化され限定化されると考え、幼児教育においては絵本やアニメーションなどの視覚性を有する教材の重要性はいうまでもないことであるが、画像により形成されるイメージの特質と言語表現の関係性を意識しておくことが非常に重要であると考えている。そして、そのことを十分に学生に認識させた上で、紙芝居の作成とその読み聞かせを行っているのである。

「言葉」は「言葉」単独では存在し得ないのであり、ここでは「言葉」と「表現」との関連性の意味を学生に深く考えさせるいい機会になったと考えられる。逆に言えば、学生に対してこのような意識付けをした上で、紙芝居作成を指導することの重要性を我々は再認識することが必要である。

言葉遊び(ミニ指導案を作ろう)

1. 授業実践者の意図

熊田(2019)は、言葉を用いた遊びを創造することは学生の言語感覚を養うだけでなく、乳幼児の言葉を育むためには共感的なやり取りや、言葉を心や体との結びつきの中で捉えることが重要であるという考えに基づき、言葉遊びのミニ指導案を作成する授業実践を行っている。

2. 授業実践の内容・特色

- 1) この活動の目的は、ことば遊び詩を用いた遊びを作ることを通して、乳幼児にとって言葉とは体や心と切り離すことのできないものであるということを感じてもらうことである。
- 2) 保育実習後の振り返りにおいて学生からよく聞かれる感想に、「こどもへの言葉がけをどうしたらよいかわからなかった」というものがある。子どもと遊んだ経験が乏しい学生にとって、じぶんの声や言葉が子どもには届かないという体験は不安や自信を失うことにつながる可能性もあり、言葉の本質を考えるきっかけとする。
- 3) 本授業においては、中川(2010)による言葉の鏡餅モデル(図1)を用いて、言葉を育むためには土台となる体と心を育てる必要があるということを発達の原則として伝えている。ミニ指導案を作る活動は、この言葉の鏡餅を子育てや保育の中に盛り込んでいくための具体的な遊びの創造である。これらの活動を通して乳幼児との関わりにおいて言葉のみではなく、体と心と言葉が三位一体となったコミュニケーションが大切であることに気づいてもらうことが主要な狙いである。
- 4) 23編のことばあそび詩(谷、谷川、波瀬、1986)を学生に提示し、その中から1編を選び、遊びのアイディアシート(図2)を用いて簡易な指導案を作成させる。
- 5) 指導案の書き方に細かい決まりは設けないが、具体的な遊びの場面を決めて書くこと。また、イメージ図を描いて場面展開を分かりやすく示すこと。最も強調した点としては、子どもの体、心、言葉の全てが動き、子ども同士、あるいは子どもと大人との共感的なやり取りに発展していくような遊びを考えることである。
- 6) 学生の感想には、「詩からどのように遊びを展開したらよいか考えるのが難しかった」との

意見が多く見られた。しかし、そのような中でも「実習で出会った子どもをイメージしながら考えることができた」といった、経験と知識をつなげようとする感想も見られた。「詩から遊びを作るという発想がなかったが、音楽やリズム、振り付けたりすることで体を使った楽しい遊びに発展させることに気付いた」という学生もいた。また、「考えていくうちにどんどんアイデアが出てきた」というような感想をもった学生も見られた。

7) この活動に対する授業アンケートから見える学生の反応について次の3つにまとめている。

- (a) 言葉を切り口にして、多様な表現に触れることは楽しいことである。
- (b) 言葉を使った遊びを単に大人から子どもへ「与える」のではなく、子どもとのやり取りを楽しみながら双方向でのコミュニケーションを図ることに本当の楽しさがある。
- (c) 言葉は身体表現や心の動きとも密接な関係にあり、言葉遊びを言葉という枠の中だけで捉えるのではなく、広く体や心という視点を持つことが重要である。⁸⁾

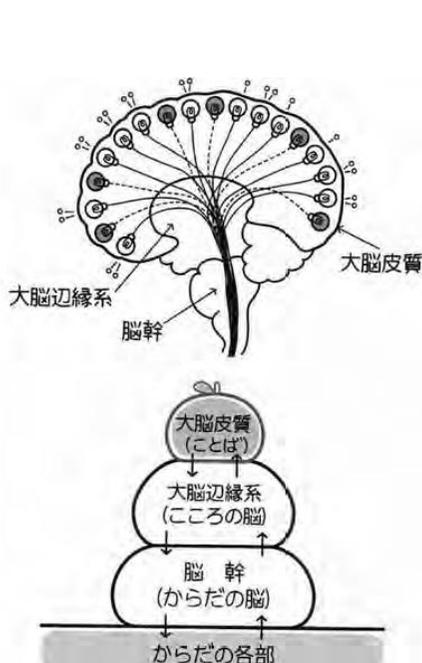


図1 言葉の鏡餅モデル

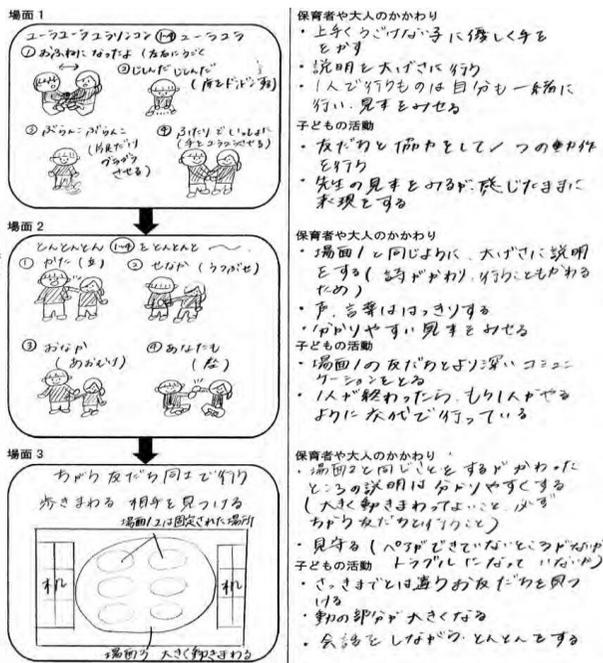


図2 遊びのアイデアシート (ミニ指導)

3. その実践から得られた結果と考察

図2の「ユーラユラ」は、言葉に体の動きや触れ合いが伴い、言葉と体と心が三位一体となったコミュニケーションになっており、かなり高度な実践力養成の授業となっていると言える。そのため、乳幼児と遊んだ経験が乏しい学生にとって、このような優れた指導案を作成することはなかなか困難なことであると考えられる。熊田も「課題の提示前に、具体的な実践場面のビデオを見せるなど、学生が遊びの場面をイメージしやすくなるような工夫が必要である」⁸⁾と述べているように、効果的な授業の展開をするには、言葉遊びのミニ指導案の作成に取り掛かる前の準備段階における丁寧な指導

が必要であることが示唆される。このように、この授業は、高度で困難を伴う面が見られるが、学生は、子どもの「言葉に対する感覚」を豊に育むための保育内容の在り方を考えることになるとともに、保育者自身の言語感覚を磨くことになるという意味では、非常に実践的で有益な授業であると言える。

総合考察

日々全国の保育者養成校において、多くの教員により様々な授業実践がなされ、試行錯誤を繰り返しながら質的向上を図っておられるところであり、幾多の特色ある授業実践があるということは言うまでもない。

本研究においては、前述の5つの特色ある授業実践例に基づいた、保育者養成校における「言葉」に関連する指導・実践活動について紹介するとともにその特色について考察を加えた。

2017年に告示された幼稚園教育要領、保育所保育指針および幼保連携型認定こども園教育・保育要領における「言葉」の領域での変更点について、「1ねらい」では従来の文言に「言葉に対する感覚を豊かにし」という記述が加えられたこと、「内容の取扱い」については「(4) 幼児が生活の中で、言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現などに触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにすること。その際、絵本や物語に親しんだり、言葉遊びなどをしたりすることを通して、言葉が豊かになるようにすること」の項目が新たに加えられた。このような変更点・追加された文言の中身について、本論文で取り上げた5つの授業実践例で考えたときに、変更点・追加された意図をくみ取った取り組みが2017年前からすでに実践されていることが分かる。

今後、保育者養成校において求められるのは、「言語活動」に関わる様々な授業を実施していく上で、子どもの「言葉」に対する感覚を豊かにし、子どもの「言葉」が豊かになるために、今現在実施している授業にどのような工夫・改善を加えていくべきなのかを今一度考え直すことである。そのためヒントを、本論文で取り上げた5つの授業実践例は示唆してくれていると考える。

ただ、課題となるのは、このような実践以前の問題としての学生達の日本語力である。いかに優れた授業実践も、学生達にある一定以上の日本語運用能力が備わっていなければ、絵に描いた餅になると言わざるを得ない。

残念ながら最近の学生について「新聞や本を読まない(いわゆる活字離れ)」「言葉で表現することができない」などの指摘がなされているのは事実である。このような状況の中で、学生に少しでも「言葉」に対する感性を磨き、表現力を身に付けさせるための様々な指導が行われている。「日本語表現」、「言葉と表現」などの名前の科目を設定して、日本語力の向上に努めている養成校もある。

大切なのは、授業の中で、学生への「日本語」の指導が授業内容と一体化していることである。子どもへの「言葉」の指導力を高めることは言うまでもなく、学生自身の「言葉」の能力を向上させる授業でもなければならぬと考える。

2016年中央教育審議会の答申では、学習指導要領の目指す方向性として、「何を学ぶか」だけでなく、「何ができるようになるか」に加えて、「どのように学ぶか」を重視し、アクティブ・ラーニングの視点から「主体的・対話的で深い学び」の観点から授業改善をすることが求められている。

5つの授業実践例においては、これらの視点が意識され、実践されていたと言える。単に、子どもへの「言葉」の指導の方法論だけにとどまらず、課題も含めた授業での言語活動を通じて、あるいは学びの過程で、学生自身の日本語運用能力を向上させるための様々な工夫がなされており、その意味でも、本論文で取り上げた5つの授業実践例は多くの示唆を与えてくれている。

今後の「言葉」に関わる授業においては、子どもの「言葉に対する感覚」を豊かに育むための保育内容の在り方とともに、保育者を目指す学生自身の日本語力を高め、言語感覚を磨くという観点からの指導がより一層求められていると言える。

引用文献

- 1) 文部科学省. (2018). *幼稚園教育要領解説*(p.213, p.229). フレーベル館.
- 2) 厚生労働省. (2018). *保育所保育指針解説*(p.248, p.263). フレーベル館.
- 3) 内閣府・文部科学省・厚生労働省. (2018). *幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説*(p.274, p.287). フレーベル館.
- 4) 加藤房江. (2015). 保育者養成校における保育内容<言葉>指導法の実践: より実践的な授業を目指して. *埼玉純真短期大学研究論文集*, **8**, 53-54.
- 5) 鈴木貴史. (2016). 保育者の絵本選択における言語表現重視の傾向とその課題: 保育者養成課程における絵本ビブリアバトルの実践から. *帝京大学紀要*, **12**, 147-149.
- 6) 岩谷恵利子・上月康代 (2019). 保育者養成校における絵本の読み聞かせの技術習得に関する一考察. *姫路日本短期大学研究紀要*, **42**, 24-28.
- 7) 西尾宣明. (2017). 幼児教育における「言葉」獲得の方法: 紙芝居作成とその活用. *プール学院大学研究紀要*, **58**, 355-358.
- 8) 熊田広樹. (2018). 「言葉に対する感覚」に焦点を当てた保育者養成短期大学における授業実践: 保育内容演習(言葉)における取り組み. *旭川大学短期大学部紀要*, **48**, 26-28, 31-32.

参考文献

- 松居 直. (1973). *絵本のカ*. 日本エディタースクール.
- 中川信子. (2010). *4歳までの「ことば」を育てる語りかけ育児*. PHP 出版社.
- 谷俊治監修, 谷川俊太郎・波瀬満子編集. (1986). *ことばがうまれるまで 障害児の言語指導にことばあそびを あたしのあ あなたのア*. 太郎次郎社.
- 文部科学省中央教育審議会. (2016). *幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について (答申)*.